

自分が「誰か」になる!?



人は、誰かのために役立つことをしたい、困っている人を助けたいという気持ちで大なり小なり持っているものです。ところが、手を差し出そうとしても、ちよつとした勇気を出すことができない、そのまま思いついてしまつたことがあつて、後悔することもよくあります。

今月の『ニューモラル』では、勇気を持って行動する心について考えます。

夜中の皿洗い



東京都内の食品会社に勤務する赤木敏孝さん(29歳)は、毎日忙しく、帰宅が深夜近くになることもたびたびです。それでも日々、張り切つて働く赤木さん。というのも、この夏、待望の二人目の子供が誕生したからです。妻の浩子さん(28歳)と長女のひとみちゃん(3歳)、そし

て、生まれたばかりの信行君の四大家族となりました。家族が増えて家の中がにぎやかになり、敏孝さんはいつそう家族のために頑張らなければという思いを新たにしています。

ある日、深夜に帰宅した敏孝さんは、子供を起こさないように、そつとドアを



開けて家に入りました。部屋をのぞくと、二人の子供を寝かしつけたばかりの浩子さんが、目で「おかえりなさい」の合図を送りました。

敏孝さんが部屋着に着替えていると、浩子さんから小さく声をかけられました。

「おかえりなさい。また残業？」

「ああ。最近、食べ物の衛生問題が関心を集めているから、どうしても遅くなるんだよ。ところで、子供はもう寝たのかい？」

敏孝さんも小さな声で答えます。

「三十分ぐらい前に、やつとね。最近は一とみまで赤ちゃんに戻ったみたいで、二人の赤ん坊を同時に世話しているような状態なのよ。ご飯にする？」

敏孝さんが目をテーブルに移すと、

ラップのかかったおかずと伏せられた茶碗が用意されています。

「あとは僕がやつておくから先に寝てもいいよ」

「ごめんさい。またすぐに信行が起きると思うから、あとをよろしく頼むわ」

浩子さんは、子供たちが寝ている部屋へ戻っていききました。

信行君が生まれてからというものの、浩子さんに子育ての負担が一手にかかり、赤木家でも家事を夫婦で分担することに なりました。敏孝さんも家事の面で、可能な限り浩子さんを手伝うようにしています。ただ、一つだけ気になることが……。

食事を終え、敏孝さんは使った食器を台所のシンクに運びました。中をのぞくと、まだ洗っていない食器や鍋などが微

妙なバランスで重ねられ、食材が入っていたトレイやラップ、野菜クズなどで山ができています。

「いつものこととはいえ、不衛生だなあ」
仕事柄、敏孝さんにとって衛生面の不備は大敵。どうしても気になります。皿洗いにとりかかったものの、心穏やかではありません。

皿を洗い終えた敏孝さんは、一枚一枚ふきんで水気をふき取って食器棚に収納しました。

「よし、きれいになったな。これで明日の朝は楽に食事の準備ができるだろう。でも、すぐにまた元の状態にもどってしまおうな……」

そんなことを思いながら、敏孝さんはため息をつきました。

自分が「誰か」になつてみればいい



翌日、敏孝さんが上司の山田課長と一

緒に昼食に出かけると、次のような言葉
をかけられました。

「お子さんは元気か？ 子供が二人にな
ると家庭は大変だろう」

その言葉に敏孝さんは、昨晩のことを
つい愚痴のように話してしまいました。

「妻は子育てや家事で忙しいのは分かる
んですけど……」

「なるほど。帰つてからもう一仕事待っ
ているわけか……。そういうえば、僕にも
似たような経験があつたなあ」

そう言つて山田課長は微笑みながら話

を続けました。

「仕事でもそうだけど、これ、誰かが
やってくれないかな」と思うことがある
だろ？ でも、そのときにみんながそう
思つていたら、結局は誰もやらないこと



になつて、ほつたらかしになる。たいていの場合、誰かがやるから問題にならないが、赤木君がその『誰か』になつてみればいいんだよ。

掃除や炊事は誰かがやらなければならぬ。もしもの話、奥さんが病気が何かに寝込んだら、家事をする人は君しかない。そのときにどうするのか。そんなふうに考えてみたらどうだろうか。

家でも赤木君が『誰か』になつたら、奥さん、きつと喜ぶぞ」

「妻が病氣になつたら、ですか……」

敏孝さんは、つぶやきました。

「もしも、の話だよ。旦那が仕事から帰つてきて、不平不満いっぱいの小難しい顔で皿を洗つていたりしたら、奥さんは心が痛むんじゃないのかな」

山田課長の言葉を聞きながら、妻の気持ちまで考えていない自分に気づいたのでした。

その日も夜遅く、帰宅の途についた敏孝さんは、電車の中で昼休みの山田課長との会話を思い返していました。

「台所は誰かが必ず片付けなければならぬか……。妻にその「誰か」を期待していて、表面上は優しくしているようでも、心の中では、その期待にこたえてくれない妻を責めていたのかもしれない。課長が言うその「誰か」が僕であつてもいいのだから……。食器をきれいにしても、心が不平不満で汚れていたらつまらない。むしろ、積極的にその「誰か」に自分になろうとしたほうが気持ちいい。なぜ今まで、こんな単純なことに気づく



ことができなかつたのだろう”

そんな思いが敏孝さんの頭の中を駆け巡りました。そして、妻に対するこれまでの自分の心づかいを反省したのです。

敏孝さんが家に着いて玄関を開けると、浩子さんが口に指をあてながら、小声で出迎えの挨拶と、ちようど、ひとみちゃんと信行君が寝たところだということとを告げました。

キッチンへ行くと、テーブルの上に夕食が用意されています。そして、シンクに目を向けると、やはり、食器の山がありました。その視線に気づいた浩子さんが何かを言おうとするのを、敏孝さんは手で制します。

「大丈夫、子供たちの世話、大変だろ？ 僕が片付けておくよ。僕が忙しいときに

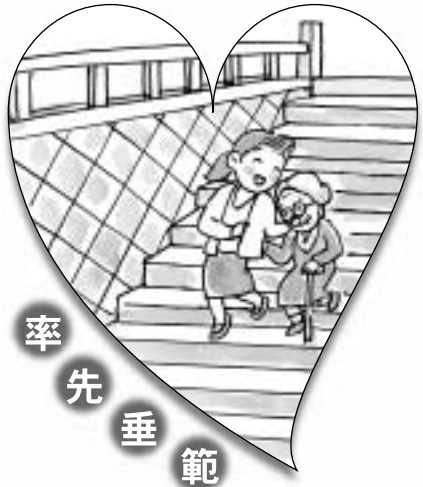
は、代わりに君がやってくれればいいから

そう言つて笑顔を浮かべます。

※

子供が小さいうちは、夫と妻のどちらかが家事をすることになります。その家事をお互いが押し付けあうようなことがあれば、家の中が落ち着かなくなつてしまいます。「率先垂範」という言葉がありますが、「そつせんすいはん」「誰かがやらなければならぬのなら、自分がその誰かになる」——そう考え方を変えることで、心が前向きになり、率先して実行する意欲いよくが持てるのではないのでしょうか。

「誰かになる」という思いは家庭だけでなく、社会の中でも大切なことです。一人ひとりの「誰かになる」という思いは

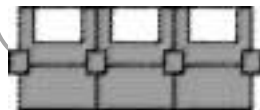


小さなものですが、この思いが親切や助け合いとして現れれば、私たちの社会は大きく変わっていくことでしょう。そのためにも、他人任せではなく、まずみずからがその「誰か」になる勇気が必要です。

次に紹介するのは、電車の中で「誰か」になつた人の話です。



老夫婦の 乗車



都内の電機メーカーに勤める高倉雄一さん（31歳）は、同僚の田中孝司さん（28歳）と大阪へ出張することになりました。朝一番の新幹線に乗り、大阪で仕事を終えた後、すぐ東京に戻る日程です。

思いのほか仕事が長引き、二人は帰りの切符を窓口で買い求めようとなりましたが、指定席はすでに満員。仕方なく、自由席の車両で帰ることにしました。

ホームで乗車の列に並んでいると、新

幹線が入線し、高倉さんと田中さんは、我先にと乗り込みました。二人は、扉から少し離れた二人がけの座席に座りました。高倉さんは無事に仕事が終わり、ほっと胸をなでおろしました。田中さんも安堵の表情です。車両の扉付近に目を向けると、混雑のため右往左往している他の乗客の姿がありました。

新幹線は出発し、しばらくすると二人の乗った新幹線は京都駅に着き、降りる乗客と乗り込む乗客とで扉付近は混雑を増しています。

「もう空席はないし、京都から乗ってきたお客さんは、下手すると東京まで立ちっぱなしか。大変だなあ」と高倉さんが思っていると、車両に入ってくる老夫婦の姿が目に入りました。



男性のほうは杖をつき、足元が少し不自由な様子。女性は大きなバッグを肩にかけながら男性を支えています。

その老夫婦を見たとき、高倉さんの心の中にいくつもの考えが浮かびました。

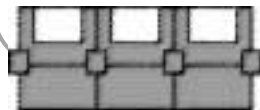
「どこまで行くのか分からないけど、東京までだったらこれから二時間半近くかかる。

名古屋で降りるにしても、三十分。あの様子では、その三十分を立ち続けるのは辛いだろうな。誰か席を譲ってあげる人はいないんだろうか。僕が譲ってあげようか……。でも、譲ったら三十分、へたすれば二時間以上は立っていないかならぬならぬ……」

高倉さんの心に、そんな思いが浮かんで消えていきました。



心地よい 疲労感



その老夫婦と目を合わせないように、高倉さんはうつむいていました。老夫婦が高倉さんの席近くまで来ました。そのとき、隣の通路側に座っていた田中さんが、「よろしければ、こちらにお座りになりますか」と声をかけました。女性は突然の申し出に目を丸くしています。戸惑いながらも「よろしいのですか」と言いながら、夫を席に座らそうと促します。高倉さんも慌てて、「あ、こ、こちらも、



どうぞ」と言つて立ち上がり、自分が座つていた席を空けました。

女性は夫を窓側の席に座らせ、笑顔で浮かべて深々と二人に頭を下げると通路側の席に座りました。

二人は、手荷物を持つてデッキに向かいました。高倉さんは田中さんに「君は偉いなあ」と声をかけました。

「実は僕もあの夫婦が気になつていたんだ。でも、いろいろな考えが頭に浮かんで、席を立つというちよつとした勇氣が出なかつた。でも、君のおかげで席を譲ることができてよかつたよ。あとで悔やまずに済んだよ。ありがとう」

その言葉を聞いて、田中さんは安心して、田中さんに安心したように答えました。

「『ありがとう』だなんて、高倉さんま

で立たせてしまい、申し訳ありませんでした。私も正直言つて、本当は立とうか立つまいか、寸前まで迷つていたんです。そのときに、田舎の祖父父母の姿が思い浮かんで……。

でも、席を譲るだけのことなのに、なんで緊張するのかわかりませんよね」

田中さんはそう言つてはにかみます。「そんなふうには見えなかつたぞ。躊躇せず席を譲つたので、僕も勇氣を出すことができた。誰かが立てばいいのにと思つていたが、自分がその「誰か」になることができてよかつたよ」

※

新幹線が次の停車駅の名古屋に着いてしばらくすると、席を譲られた老婦人が高倉さんたちのところへやってきました



た。そして、車掌に指定席を確認してもらい、席がとれたと告げました。

「お二人とも、お席をありがとうございます。私たちは指定席に移りますので、どうぞお座りください。長い時間、立たせてしまい、お疲れのところを申し訳ありませんでした」

そのご婦人は恐縮して何度も頭を下げます。

「いえいえ。毎日の通勤時間はもつと長いので、どうかお気になさらずに」と高倉さん。田中さんも笑みを浮かべて「道中お気をつけてください」と伝えました。

二人は老夫婦に譲った元の座席に移りました。席に座ると、心地よい疲労感とともに、高倉さんの心は温かくなっていました。

道徳の実行には勇気が必要

善いことを行うときには真の勇気が必要です。中国の孔子は「仁者必ず勇あり、勇者必ずしも仁あらず」と述べ、道徳の実行には他人に率先して行うだけの勇気が必要であることを説いています。

私たちの心は、ともすると「自分さえ良ければよい」といった自己中心的にはたらきやすく、進んで思いやりの心を起こして、道徳を実行するのはなかなか難しいようです。また、「道徳」と聞くと、自分一人だけが行っては損だとか、人目を気にするあまり「恥ずかしい」「照れくさい」といった心にとらわれて、敬遠してしまう人が少なくありません。



しかし、日常生活の中で、自分と他人との密接な人間関係を築く基本は、相手を思いやり慈しむ心、すなわち道徳心にあります。道徳は人間関係の潤滑油といわれる所以がそこにあります。そして、何よりも先んじて善いことを行えば、実行した本人が大きな喜びと満足感を味わうことができます。

人間を尊重する精神が希薄になつてい
る今日のような社会にこそ、善いことを
みずから率先垂範する心づかいと行いが
求められています。一人でも多くの人が
道徳心をはぐくみ、それを日常生活の中
で勇氣を持って実践していくことができ
れば、家庭の中も社会の中も、きつと明
るくよりよく改善されていくことでしょ
う。

